

平成26年度
入学試験問題

国 語

特待生
前期

受験番号	氏 名

中村中学校

□ 次の(1)～(10)の——線のカタカナを漢字に直して答えなさい。

- (1) 町のコウロウ者が表彰される。
- (2) 事件は社会のフウチヨウを反映している。
- (3) 世の中のカンシユウにしたがう。
- (4) 宇宙はサイゲンなく続いている。
- (5) 登山の計画をメンミツに立てる。
- (6) きのうハイシヤクした本をお返します。
- (7) 卒業式の後、シャオン会に出席する。
- (8) この絵が目にトまった。
- (9) 悪者にサバきが下る。
- (10) つり糸をタらす。

〔二〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

* 字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

今回はテレビや新聞などのメディアから発信される情報と、「表現の自由」について考えてみたいと思います。

こうした情報について考えるときに、前提として理解しておかなければならないことがあります。それはメディアから流される情報は、事実に対してなんらかの評価が加えられて流されているということです。そこには評価し、判断する人の考えや価値観が反映されています。

テレビや新聞を見ると、どうしてもそこに書いてあることだけが客観的な真実のような気がしてしまいます。〔I〕、その

ニュースは世界中に無数にある事件の中から番組制作者や編集者が選択したものです。どのニュースを報道するかを一定の価値観に基づいて判断した結果です。

テレビならば何分放送するか、どのような映像を流すか、反対の人の意見をどうするかなど、すべて番組制作者の意見や価値観がここには反映されます。そして、そのような報道を正しくないと考える人がいるかもしれません。けれど、「この番組内容は中立的でないから変更したほうがいい」という批判もまた、ある価値観に基づ

いた一つの主観的意見にすぎないということになります。

① 問題はこのように意見が対立したときに、誰がどのようにその善し悪しを決めるのかということです。国や政治家が、「この内容は偏ってよくないから内容を変更すべきだ」ということを、一方的にメディアに押しつけることができるとしたらどうなるでしょうか。② それでは国や政治家の気に入った番組や記事しか流されなくなってしまうです。

〔II〕、アメリカがイラク戦争を始めるときに、「イラクには大量破壊兵器が隠されていてテロリストとつながっている」という情報だけが、政府の影響を受けてメディアから大量に流され、多くのアメリカ国民がそれをもとにイラク戦争賛成という判断をしてみました。しかし、その情報はまちが이었다ことが今では明らかになっています。何万人もの命を奪う結果になるような、重大な判断材料となる情報が正しく流されず、国民が自由に情報に接することができないと、大きな不幸を招くという一例です。

メディアから流される情報の善し悪しは国や政治家のような権力をもった者が判断するのではなく、あくまでも、情報を受け取る側である国民がみずから判断するべきものなのです。国や政治家はメディアの報道内容に③をさしはさむべきではありません。

私たちには、国の干渉かんしやうを受けずに自由に表現し、

III 情報

を受け取る自由（知る権利）が保障されています。憲法二一条一項は「集会、結社及び言論、出版その他一切の表現の自由は、これを保障する」と規定していますが、これは「表現の自由」とともに国

40

民の「知る権利」を保障したものだと考えられています。表現行為は情報の受け手が存在してはじめて意味をもつものですから、二一条一項は情報が公表されてから受け手が受け取るまで、その過程のすべてを国家権力による干渉から保護しているのです。

私たちは自分の思いや考えを人に知ってもらったり、また、人の

45

発表するものを見たり聞いたりすることで、より幸せになることができます。たとえば、アーティストは自分のつくった楽曲を多くの人に聞いてもらうことで、みずからの才能や役割を確かく認にんし、喜びを感じるのでと思います。そして私たちも、好きな曲を自由に聞いて楽しむことで心が豊かになります。もし、「この曲はよくない曲aだから聞いてはいけないb」と国が決めつけてきたら、みなさんも納得なつとくできないでしょう。c

50

このように何かを表現したい、知りたいという欲求は、もっとも人間らしい、私たちの本質にかかわるものなのです。「その人」らしさという意味では人間の尊厳にかかわるものです。

55

さらに「表現の自由」「知る権利」は私たちの政治にとって不可

欠であり、民主政治にとって重大な意味をもちます。

民主政治は一人ひとりの国民がその知りえた事実に基づいて判断した考えを、議論を通じて実現しようとするものです。国民が十分に議論をして何が正しいかをみんなでみつけようとしているときに、「こう考えなければだめだ」と特定の考え方を押しつけられたのは、民主政治は成り立ちません。

60

そもそも民主主義は、何が正しいかわからないからこそ、みんなで議論しお互いたがの考えをぶつけ合って、もっともよいものをみつけ出そうとするものです。そこでお互いが自由にものを言えなければ成り立たないのです。

65

国や政治家が特定の考えをメディアに押しつけることも、メディアの自由な報道に何らかの影響を与あたえるような行動をとることも許されません。国や政治家などの権力をもつ者は、国民の思想や言論活動といった精神的な営えいみの領域には立ち入ってはいけません。それは「表現の自由」を侵害しんがいし、人間の尊厳を傷つけるだけでなく、民主主義の本質をつき崩くずしてしまうことになるのです。

70

（伊藤真『中高生のための憲法教室』）

問一 I Ⅲ にあてはまる語を次からそれぞれ選び、

記号で答えなさい。

ア、たとえば イ、つまり ウ、しかし エ、かつ
オ、あるいは

問二 〓 線A「善」し、B「招」く、C「嘗」みの漢字の読み

をひらがなで書きなさい。

問三 ―― 線①について次の問いに答えなさい。

(1) これは、どういう人とういう人の意見の対立ですか。次の

A、B に入る言葉を本文からぬき出しなさい。

A (五字) と B (二十六字) と考える人の意見の対立。

(2) Bの意見の問題点を次から選び、記号で答えなさい。

ア、Bの意見に反対している人のことを十分に考えていない点。

イ、Bの意見そのものも、一部の人の意見でしかないという点。

ウ、テレビのような公わやけの場で、かたよった意見を報道している点。

エ、時間や映像に気を取られ、伝えたいことがはっきりしない点。

問四 ―― 線②とありますが、このことを筆者が良くないと考えるのはなぜですか。その理由を次から選び、記号で答えなさい。

ア、大きな権力をもった人が戦争に賛成したときには、国民はその判断にしたがうしかない立場にあるから。

イ、気に入るかどうかはその人の好みの問題であり、政治のよ
うな大切なものを好みにまかせるわけにはいかないから。

ウ、国や政治家が情報の選択をまちがった場合に、国民全体が
判断をまちがってしまう可能性があるから。

エ、情報の善し悪しを決めるのは難しく、政治家よりも豊かな
知識を持っている専門家にまかせるべきだから。

問五 ―― 線③とありますが、この()の中に当てはまる言葉
を漢字一字で書きなさい。

問六 ―― 線④とありますが、この憲法では何を守るために「表

現の自由」と「知る権利」を保障していると筆者は述べてい
ますか。これより後の内容から二つの点についてそれぞれ五
十字以内でまとめなさい。

問七 ~~~~~線 a s c の「ない」から一つだけ文法上の種類が異なるものを選び、記号で答えなさい。

問八 次のア～オについて、筆者の考えに合うものには「A」を、

合わないものには「B」を解答らん(らん)に書き入れなさい。

ア、最近のテレビや新聞などから流れる情報は、特定の人の考

えや価値観が反映されていることが多くなった。

イ、ある情報を得たときにそれが正しいかどうかを判断すべき

なのは、情報を受け取る国民自身である。

ウ、憲法では表現行為をする人の権利だけでなく、その表現を

受け取る人の権利も保障されている。

エ、他人の発表を見聞きするだけでなく、自分から発表するこ

とでも人は幸せを感じることができる。

オ、権力を持つ者がメディアの自由な報道を許していない現在

の日本は民主主義的とは言えない。

〔三〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本

文を改変、省略した部分があります。)

* 字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

「ぼく」は妻のミキ、息子の優介、娘の美咲の四人で幸せな生活を送り、二人の子どもが通う小学校のPTA会長もつとめている。優介が五年生の時にだいちゃんという男の子が転校してきた。だいちゃんは優介と仲良くなり、家にも遊びにくるようになったが、六年生になってから優介が「だいちゃんってうそつきなんだよ。」と言いだす。だいちゃんのお母さんは本当のお母さんではなく、だいちゃんを殺そうとしてごはんを食べさせてくれないと言っていると笑う。そんなある日、「ぼく」はPTAの定例会議に出席した。

PTAの定例会議の後、校外委員長の酒井さんから相談を受けた。 1

同じマンションの男の子が、ひどくどなられたり、たたかれたりしているようで心配だと言う。

だいちゃんのことだった。

「うちにもどなり声きこえるよ。むかいだから。おとうさんがなつてる。」 5

広報委員長の阿見さんもうなずく。

「そうそう。その家。」

「微妙だよ。別に元気にしてるしね。」

「引越してきたばかりのとき、うちでお昼ごはんを食べさせたんですけど」

酒井さんは言った。

「ほんのおかあさんじゃないって言ってました。おとうさんはほんのおとうさんだけど、一度もたたかされたことなかったのに、あのひとが来てから、たたかれるようになったって言ってました。」

「そんなこと言ってましたか。」

「ええ、そのころは。でも、今はもう全然。大丈夫？ って声かけても、大丈夫ですってしか言わなくなっちゃって。お昼食べた？ ってきいても、食べましたって。もう大きくなったし、はずかしいんでしょね。ごはんを食べさせてもらえないこととか、たたかれることとか、はずかしくて、言えないんでしょね。それがかえって深刻な気がするんですけど。」

でっぷりと肥えた酒井さんは、そのときのことを思い出したのか、涙ぐんでいた。自身のこどもは五人いるという。容量の特別大きな愛情の☆のようなひとだ。

「そういえば、あいつんちまま母なんだろうって、うちに遊びにきてた子が言っていました。そういうの、こどもって残酷ですよね。」

阿見さんもうつぶく。

「あの子のせいじゃないのに。」

ばんぱんにふくれた手の甲で、酒井さんは涙をぬぐった。

「まずは学校側に伝えましょう。ぼくも様子を見守ります。」

ぼくが言うのと、酒井さんと阿見さんは頭を下げた。

「よろしく願います。」

よそのこどものことaで、おしみなく涙を流し、頭を下げる彼女たち。働きに出ていないとはいえ、役員の仕事に割く時間のやりくりはたいへんだと思う。彼女たちのおかげで、関心のない親たちのよせあつめのPTAも、なんとかやっていけている。

うそつき。

ぼくは、優介がくりかえす言葉を思い出していた。

だいちゃん①がうそをついていると信じているのは、きっと、優介だけなんだろう。

だから、だいちゃんはうちにやってくる。

赤い自転車で丘をくだって、小学校の丘をのぼり、またくだって、うちにやってくる。

現実の全てはうそだと、だいちゃんaはうそつきだと信じてくれている、優介のもとに。

〈中略〉

それから、ぼくたちは、休みのたびにだいちゃんを連れて、五人
ででかけるようになった。サッカーの試合を観にいったり、海でバー
ベキューをしたりした。

A クーラーボックスひとつ持つにもふらふらしていただ
いちゃんが、みるみるたくましくなっていくのがうれしかった。美咲
も優介も、だいちゃんが一緒のほうが楽しそうだった。そしてだれ
より、だいちゃんがまじることで兄妹げんかがなくなったと、ミ
キが一番喜んでいた。

桜が丘小は前期と後期の二学期制なので、秋休みという奇妙な
休みがある。

休みに入るとすぐ、だいちゃんが泊まりにきた。 B 泊ま
りというのは親に無断ではできないので、ぼくが電話して断りを言っ
た。電話に出た母親は眠そうな声で、もぐもぐとしゃべり、その中
に C 、お礼のような言葉がふくまれていた。 D 、優
介がだれなのか、よくわかっていないようだった。

〈中略〉

朝ごはんは、パンとゆで卵と、ベーコンとレタスのサラダだった。

ミキが、ゆで卵をふたつに割りながら、だいちゃんに言った。
「あたしね、卵の黄身がきらいなんだ。だから、いつもね、このひ
とが食べてくれるの。はい。」

ミキは、つるんとはずれた黄身を、ぼくの皿にのせた。
「あたしね、結婚するなら、黄身のすきなひとと結婚しようって、
ずっと思ってたんだ。」

「ずるいな。」

「いいの。」

「じゃあさ、おかあさん、結婚するまではどうしてたの？」

「それまではねえ、おばあちゃんが食べてくれたの。」

「おばあちゃんって、埼玉の？」

「ううん、それはあたしのおかあさんでしょ。あたしのおかあさん
のおかあさん。美咲も優介も知らないよ。あたしが結婚する前に死
んじゃった、あたしのおばあちゃん。あたしのおかあさんが全部食
べなさいって怒るからね、おばあちゃんがいつもこっそり黄身を食
べてくれたの。」

「あまえてるな。ぼくには残さずに食べろって言うくせに。」

III

ミキのおかあさんとおとうさん。優介が生まれたことを四月ばかりだと思っていたミキの両親。だいたいミキの名前がカタカナなのは、漢字をどうしようか迷っているうちに時間切れになって、しかたなくカタカナで出生届を出したせいだった。

その母親の母親、ミキのおばあちゃんに、ぼくは一度だけ会ったことがある。

がんも末期だった。ミキとミキのおかあさんと一緒に、病室にいさつに行った。

看護師に呼ばれたミキとミキのおかあさんが席を外したときに、おばあちゃんがぼくに言った。

「ミキはなあ、あいつは、卵の黄身がきれえなんだ。」

おばあちゃんにとって、ミキは、たったひとりの孫だった。

「おれもきれえなんだけど、ミキがかわいそうだから、食ってやってたんだ。」

おばあちゃんはぼくを見上げた。痛みどめがきいているのだろう。

とろんとした目だった。寝ぼけているのかと思うくらい。

「おめえ、わかんかなあ、そうゆうん。」

「わかります。」

b ぼくは即答した。おばあちゃんはゆっくりほえんだ。そのまままどろんでしまいそうなたよりなさだった。

105

おばあちゃんは結婚式までは生きていられなかった。ぼくが言葉を交わしたのは、それが最初で最後だった。

ぼくも卵の黄身はきらいだった。

だから、ぼくとおばあちゃんは同じだ。ミキの喜ぶ顔を見たくて、

ミキが叱られるのを見たくなくて、黄身を食べていたおばあちゃん。

ぼくは、ミキのおばあちゃんがだいすきだ。

ぼくも、ミキの喜ぶ顔を見たかった。ミキとはじめてゆで卵を食

べたとき、ぼくはミキの分の黄身を食べた。

「おばあちゃんとおんなじだ。」

ミキはわらった。

② ミキの知らない、ぼくとミキのおばあちゃんの同じところ。ほん

とは、卵の黄身がきれいなどころ。

③ このことは、絶対、ミキには言わない。

ミキはいつものようにわらいながら、白身をおいしそうに食べて

いる。ミキがわらっているから、美咲も優介もだいちちゃんもわらっ

ている。

それを見ているぼくまでわらってしまう。

朝から雨が降っていた。

昼下がりに開けた郵便受けには、事務所への仕事の手紙と一緒に、

雨のしずくの落ちたはがきが届いていた。

優介への中学校就学通知書だった。来年の四月に入学する中学校
が書いてある。

ぼくはぶるっと体を震わせた。雨のせいか、気温が下がっていた。
冬が近づいているのだ。

放課後になっても雨はやまなかったが、だいちゃんはいつものよ
うに遊びにきた。

ぼくが現場でぬれた作業着を着替えるため、家にもどると、ふた
りは居間の床でくすぐりっこをしてじゃれていた。

「おまえ、脇は平気なくせに、首が弱いな。」

だいちゃんに首をくすぐられ、優介は息が切れるほどわらっていた。

だいちゃんは、同じ小学校からほとんどのこどもが行く中学校で
はなく、となりの中学校に行くことになる。優介とはお別れだ。

学区が異なる中学校に行くためには、学校長に許しを得なくては
いけない。だいちゃんの親がそのために奔走することはないだろう
し、だいちゃんがそれを親に頼むこともないだろう。

雨の中、おそらくだいちゃんの家にも届いている通知書には、別
の中学校の名前が書かれているはずだ。そのことをだいちゃんはき
と知っている。優介はまだ知らない。いずれ優介が知ったときには、
だいちゃんがまた、うそをついてみせるのだろうか。

145

140

135

130

「次、スピードしようぜ、スピード。」

優介がまだ床にあおむけになったまま言った。そういえばこの子
は幼稚園のころ、先生に抱きついていないときは、よく床を転がっ
ていた。自分以外のものにふれていることで、自分の存在をたしか
めているようだった。

「将棋がいいな。」

だいちゃんが言う。

「じゃあじゃんけん。」

あおむけのままの優介とだいちゃんはじゃんけんした。優介はチョ
キを出し、だいちゃんはパーを出した。

「やったあ。スピード、スピード。」

優介はとびおき、自分の部屋にトランプを取りに走った。ぼくの
横をすりぬけると、ぼくにわらいかけながら言った。

④ 「あいつとじゃんけんしたら、いつも勝つんだよ。」

優介はいつもはじめにチョキを出す。

きつと、優介は永遠に気づかないだろう。なぜだいちゃんじゃ
んけんをしたら、いつも自分が勝つのか。

だいちゃんは居間の窓枠に置かれた家族写真を眺めていた。

(中脇初枝「うそつき」『きみはいい子』所収)

165

160

155

150

※奔走……あちこちかけ回ること。

問一 ☆ に入る言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア、宝 イ、川 ウ、森 エ、器うつわ

問二 ~~~~~線 a、b の語句の意味をそれぞれ選び、記号で答えな

さい。

a 「おしみなく」

ア、心配するそぶりをし

イ、いらだちながら心配して

ウ、かぎりなく親身になって

エ、親身になる様子を見せ

b 「まどろんで」

ア、すぐにとけて

イ、うとうとと眠って

ウ、はかなく消えて

エ、話せなくなつて

問三 ———線 ①とありますが、なぜだいちゃんは優介のもとに

やってくるのですか。それを説明した次の文章の 1

く 3 に入る言葉を本文中からぬき出して答えなさい。

だいちゃんのお母さんは 1 (九字) ではなく、ご

はんもろくに食べさせてもらっていない。お父さんは新しいお

母さんがきてから、だいちゃんをたたくようになった。そうい

う 2 (八字) だと思いたい今のだいちゃんにとって、

自分を 3 (九字) くれている優介だけが、安らげる

存在であるから。

問四 A D に入る言葉を次からそれぞれ選び、記

号で答えなさい。

ア、さすがに イ、かろうじて

ウ、あいかわらず エ、はじめは

問五 I III に入る文を次からそれぞれ選び、記号

で答えなさい。

ア、優介が言い、まただいちゃんがわらった。

イ、ミキが言い、ぼくがわらう。

ウ、優介が言い、だいちゃんがわらう。

エ、美咲が大人おとなっぽい質問をした。

問六 ——— 線②とありますが、本当は卵の黄身がきらいなのにそ

れを食べる「ぼく」とミキのおばあちゃんには共通する思い
があります。どのような思いがあるのか、解答らんに合うよ

うに十字以内で答えなさい。

(十字以内) という思い。

問七 ——— 線③とあるが、なぜ「ぼく」はそう決めているのです

か。次から選び、記号で答えなさい。

ア、卵の黄身がきらいだということは二人だけの秘密にしよう

とミキのおばあちゃんと約束していたので、約束を破った

ら申し訳ないと思っているから。

イ、本当は卵の白身の方が好きなのだと言おうこともでき

ないので、これまでついてきたうそを重ねていくしかない

と思っっているから。

ウ、おばあちゃんがいなくて、自分がおばあちゃんの代わりに

卵の黄身を食べてやらなければ、ミキはずっと卵を食べら

れなくなってしまうから。

エ、何も知らないミキの幸せな笑顔えがおがまわりも幸せにしている

ので、「ぼく」は卵の黄身が好きなのだそのまま信じ続

けてもらいたいと思っているから。

問八 ——— 線④について、次の問いに答えなさい。

(1) なぜ優介はだいちちゃんとのじゃんけんでいつも勝つことができるのですか。四十字以上五十字以内で答えなさい。

ると同じく、だいちゃんは優介を弟のように思っており、勝つ理由を分かっている優介の様子を見て、今後もずっと兄のようにふるまっていたいと思っているから。

(2) 「ぼく」だけが気づいていると思われる、だいちゃんがいつもじゃんけんで優介に負ける理由を、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア、争いごとを好まない「ぼく」が、好きでもない卵の黄身をミキのために食べているのと同じく、だいちゃんは、ちがう中学校に通うことが分かっている優介とわざわざ面倒な争いを起こすことはないと思っているから。

イ、「ぼく」が家族の温かさに包まれて毎日過ごしているのと同じく、だいちちゃんも今、友人である優介の家で楽しく過ごしているので、離ればなれになってもこれまでと同様、週末には優介の家に泊まりに来たいと思っているから。

ウ、本当は好きではない卵の黄身を、ミキのために食べてあげている「ぼく」と同じく、だいちゃんは、じゃんけんに勝つて無邪気に喜んでいる優介を見るのが好きで、優介にはいつも笑顔でいてほしいと思っているから。

エ、「ぼく」がいつも妻のミキのことをおおらかに見守っている